

名作展 いくつか夢見た桃源郷 —川端龍子の戦後の作品から

大田区立龍子記念館（中央4—2） 24.06.22～09.12



「川端龍子」(1885～1966)は、大画面に豪放な筆致で観る者に強烈な印章を与える日本画家として知られ、その一方で物語性の溢れる作品や豊かな想像力で描きあげた幻想的な光景に、優しい眼差し等と多彩な作品を描いている。作品は《かわせみ》

画伯の戦後の制作は、戦前、戦中の緊張感の高まっていた時代とは一転し、微笑ましいユーモアに満ちた世界が表された作品が多いのが特徴である。

川端龍子 《獺祭（だっさい）》 1949年



俳句の歳時記で春の部にある「獺（おそ）の歳時記の春の部にある「獺（おそ）の祭」から想像した作品で、愛らしいおどけた表情の「カワウソ」が描かれている。このユーモラの中に潜む不気味さは、完璧な日本画技法による超現実的画想とされている。

川端龍子 《沼の饗宴》 部分 1950年



「河童」の嫁入りという画想作品で、河童の大群を水中カメラで捕らえたように、「睡蓮」の葉は上部からと自由自在の構成で、水墨画の潤いがある表現が詩情あるものになっている、とてもユーモアがある作品であるとされる。